

平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称 : 人文学フィールドワーカー養成プログラム
 機 関 名 : 名古屋大学
 主たる研究科・専攻等 : 文学研究科人文学専攻
 取組実施担当者名 : 周藤 芳幸
 キーワード : フィールドワーク概念の拡張、「方法」を軸とするカリキュラムの導入、教育研究推進室の設置、公募による調査実習への支援、アカデミック・アドヴァイジング・コミッティの設置

1. 研究科・専攻の概要・目的

名古屋大学文学研究科人文学専攻は、学生数318名（前期課程133名、後期課程185名）、教員数60名（教授35名、准教授18名、講師2名、助教5名）（平成19年5月1日現在）を擁し、創設以来中部圏における基幹的な教育研究拠点として、人文学の諸分野に優秀な人材を輩出してきた。とりわけ、平成14年度からは21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」の推進を通じて、また平成19年度からはグローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」への取り組みによって、研究の目覚ましい高度化と国際化を図りつつある。教育面では、平成17年度に研究科が養成する人材を「人文学的な知の伝統に立脚することで現代社会の課題に立ち向かう足腰の強い研究者」と位置づけ、博士後期課程における「特別研究」の必修化、国際的に活躍し本研究科と交流実績のある研究者から構成される外部諮問機関（アカデミック・アドヴァイジング・コミッティ（略称AAC））の設置準備など、この理念を実現するための具体的なシステム改善に着手してきた。さらに、平成19年度には、専攻の人材養成目的を「人文学における高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識および卓越した能力を持った研究者並びに高度専門職業人を養成すること」と定め、「人文学フィールドワーカー養成プログラム」が本事業に採択されたことを契機とする従来の教育カリキュラムの抜本的な改革に邁進している。

2. 教育プログラムの概要と特色

「人文学フィールドワーカー養成プログラム」は、研究科の履修プログラムに新機軸を打ち出すことで、大学院教育の高度化を図ろうとする試みである。具体的には、従来の学問領域（専門あるいは研究室）に基

づく履修コースの上に、フィールドワークという方法をベースとする履修プログラムを新たに導入する。また、大学院教育の実質化に責任をもつ組織として、副研究科長一名を室長とする教育研究推進室を設置して専任の事務補佐員を配置し、プログラムの円滑な実施ばかりではなく、大学院教育の全般を支援する。さらに、大学院教育の質を国際的な視座から保証するための機関として、人文学の諸分野で国際的に活躍する研究者から構成される諮問機関（AAC）を設置する。写真1にAACの委員を交えて開催されたワークショップの様子を示す。



写真1 UCバークリー校G・フェラーリ教授によるワークショップ（右がJ・マニング・AAC委員）

これらの改革によって実質化された大学院教育を通じて、フィールドでの研究成果を国際的に発信することのできる能力を備えた若手研究者を養成するのが、このプログラムの中心的なミッションである。

このプログラムでその養成をめざす「人文学フィールドワーカー」とは、「人文学の固有の伝統によって培われた研ぎ澄まされた知性を武器に、自らの身体によ

って現場の知を体系化することのできる行動的な研究者」のことである。いうまでもなく、フィールドワークとは、一般的には社会学や人類学の領域で築き上げられてきた方法論に基づく社会（野外）調査のことを指している。しかし、このプログラムでは、フィールドワークの概念を拡張することによって、これまで知られていなかった歴史の史料や公刊されていなかった文学作品の草稿などを探し求め、それに研究の光をあてる一連の知的営為を広くフィールドワークとみなすことにより、フィールドでしか味わうことのできない新鮮な発見の感動を大学院生の手の届くものとするを企図している。この目的のために、現場での調査や史資料の収集行為の方法論を大学院の教育課程に位置づけるとともに、大学院生による優れた実地調査プロジェクトに対して公募により必要な経済的支援を行うことをその骨子としている。

このように、伝統的な学問領域を基礎とする教育プログラムに対して、フィールドワークという方法論をベースとする教育プログラムを併置することは、ともすれば蝸壺的な環境の中で学位論文指導を行いがちであった今までの閉塞的な教育状況を脱するためにも、必要不可欠な改革であるといえよう。

図1に、本プログラムにおける履修プロセスの概念図を示す。

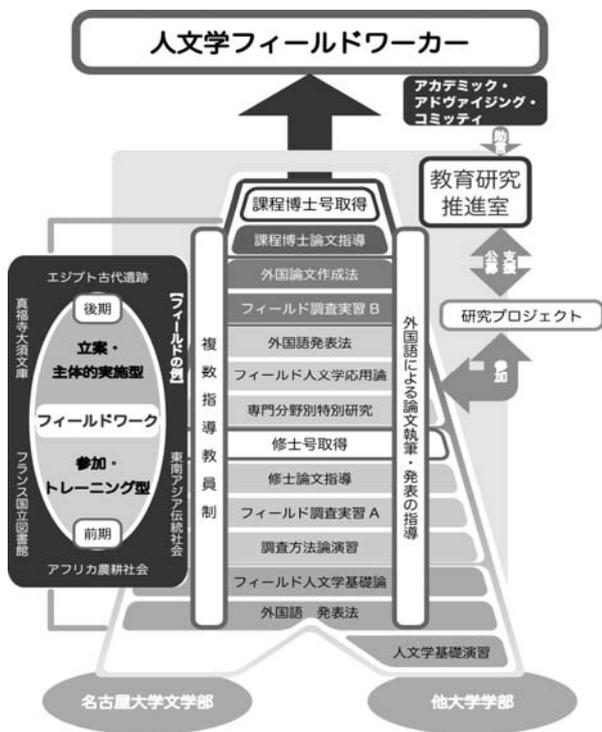


図1 履修プロセスの概念図

3. 教育プログラムの実施状況と成果

(1) 教育プログラムの実施状況と成果

「人文学フィールドワーカー養成プログラム」の根幹に位置づけられているのが、調査実習プロジェクトである。調査実習とは、「人文学フィールドワーカー養成プログラム」で履修する大学院生が、修士及び博士の学位論文を執筆するにあたって不可欠な資料を収集するために行うフィールドワークのことに他ならない。このプログラムで履修する大学院生には、前期課程の2年次に参加・トレーニング型のフィールドワークを行う「フィールド調査実習A」を、また後期課程の2年次に企画立案・実施型のフィールドワークを行う「フィールド調査実習B」を履修することが求められている。そのため、当該の学生は、前期課程1年次、および後期課程1年次の終りに、それぞれの計画する調査実習プロジェクトの申請を行う。提出された申請書類は、イニシアティブ担当者の合議によって審査され、採択された課題には資金の実費が一定限度まで支給されることになる。

このようなシステムの流れをシミュレートすると同時に、大学院生の研究の実態に即してのフィールドワークの概念を拡張するために、平成18年度は、本研究科における大学院在籍者全員を対象として国内外で行うフィールドワークのモデル事業の公募を行った。そして、8名の審査担当者による書面審査と合議を経て採択を決定した。図2は、その書面審査の結果の一部を示したものである。そして、採用された事業の実施を支援するとともに、それぞれの成果について担当者で協議した。採択にいたらなかったプロジェクトについても、指導教員の助言のもとでそれぞれの研究課題に適合的な調査研究プランを練り上げさせるため、申請者を研究アシスタント（いわゆるRA）として雇用することにより、実質的な支援を行った。

このシステムを考案する上で特に留意したのが、申請書のフォーマットについてである。近年では人文系の領域でも競争的資金の獲得が死活問題となっているが、このような状況に対応していくためには、研究者養成の初期段階から説得的なプロポーザルを書くための訓練を行うことが不可欠となってくる。そこで、募集要項と申請書については、大学院の教育プログラムで同様のシステムを導入している海外の研究教育機関の例を比較検討した結果、ロンドン大学キングズ・カレッジの例がモデルとして最も適切であると判断されたため、それに依拠する形で作成した。同時に、学生

平成19年度「人文学フィールドワーカー・プロジェクト」審査コメント一覧表

＜記入方法＞
 ・審査基準1～5は、5段階評価（5：非常に優れている、4：優れている、3：普通、2：やや劣る、1：劣る）による評点を数字で記入してください。
 ・審査基準は別紙を参照してください。
 ・なるべくコメントを記入してください。

項番	専門名	プロジェクト題目	5 段 階 評 価					総合 評価順	コメ ン ト
			基準 (1)	基準 (2)	基準 (3)	基準 (4)	基準 (5)		
8	美学美術史学	19世紀フランス壁面美術の作品及び文献の現地調査 —ビュヴィ・ド・シャヴァンヌを中心に—	22	21	21	21	23	108	対象について社会史・文化史論的契機を導入する視点に漸新さが感じられる 方法は明確だが、成果と目的がどう対応するのか不明確。 問題設定と調査計画いずれも堅実であり、成果が期待できる。
1	文化人類学	多民族都市観光からみる多文化共生社会の実態調査 —マレーシアアマラッカの事例—	21	21	20	19	21	102	目的・視角・方法等理解できる。先行研究と比した独創性が不明確 この地域をフィールドとする研究者は少なくないため、調査実習を通じてより具体的かつオリジナルな問題を発見してほしい。
12	西洋史学	ザウイェト・スルタン遺跡(エジプト)におけるヘレニズム時代のギリシア語グラフィティの分布調査	22	21	21	17	21	102	指導教員の調査研究と密着しすぎるような印象を受ける 目的・方法が明確で成果が期待できる。先行研究の中での独創性が不明確。 期待される成果については、プトレマイオス朝の解明において具体的にどの分野にどのような貢献ができるのかを書くことによりよくなる。
11	日本史学	明治末・大正期における水力発電事業の発展が東海地方の産業に及ぼした影響に関する研究	21	21	20	19	20	101	これまでの研究の蓄積により発展させる期待がもてる 調査先・具体性がない。調査先における対象の存在が不明確。現地へ行く必然性が不明確。 シニアによる地域研究のひとつとして期待できる。
7	美学美術史学	ゴシック教会堂における基礎の発生とその表現について —サンス大聖堂の「美徳と悪徳」を中心に—	22	18	18	18	19	95	方法は理解できるが、その後の発展性が不明確。 申請書をもう少し丁寧に書いてほしい(文章表現、「」の有無など)。 プロジェクトの内容、方法論、独創性や期待される成果などについて、もう少し具体的に整理して書いたほうがよい。争ひとつわがりにくい。
5	比較人文学	ファーローにみるタカリーの伝統と変容 —民族誌的記録と映像人類学研究	20	19	19	18	18	94	興味深い対象をユニークな視点と方法で調査しようとする具体的な提示を行っている 目的・視角・方法、資金を必要とする理由ははっきりしている。成果物期待できる。 きわめて重層的な試みであり、裏付けもしっかりしている。 撮影したものを上演する際、タカリーの人々にはそれをどのように公表し、成果を還元するのか。それを具体的に書かなければ、批判の対象としている従来の知的搾取と同じではないか？
4	文化人類学	ロンドンにおけるアフリカ起源の音楽、カリブソの研究 —カリブソニアンライフヒストリーを中心として—	19	18	18	18	17	90	方法が成果に結びつか不明確 カルチュラル・スタディーズの文脈にプロジェクトを位置づけても良いのではないかと、プロジェクトのタイトルも再考の余地がある(副題との対応関係が明らかでない)。 常套的な方法論の枠組の範囲内に留まり過ぎる
6	美学美術史学	中国敦煌における不空羼索観音像に関する研究	19	18	16	17	18	88	目的は理解できるが方法が不明確。(19年度の指導体制は?) 堅実であり、成果が期待できる。 申請書の書き方に工夫が深い。競争的資金の審査担当者は必ずしも専門家ではない。「論文要旨」ではないので、当該学問領域の研究動向に照らしたプロジェクトの独創性を強くアピールする姿勢が必要。
10	ドイツ文学	ノヴァリス及びドイツ・ロマン派における自然科学的環境と文学の関わり —ヨーロッパの嵐山をめぐる—	20	16	14	21	17	88	目的は理解できるが、方法が成果に結びつくか不明確。 嵐山学校との事前折衝を十分に行ってほしい。 着眼点は面白い。評価できる。しかしながら、計画書のみを限り、それぞれの知識が研究計画を遂行するために有機的に結びついておらず、どのような成果が期待できるのか不明である。 プロジェクト方法の具体性がはっきりしない。

図2 フィールドワークモデル事業の公募における書面審査（一部）



写真2 教育研究推進室のプレート

が記入する欄、指導教員が記入する欄ともに、当該学生が日本学術振興会特別研究員DCなどに応募する際に活用できることを考慮して設計した。なお、この申請書の記載内容についての審査担当者からのコメントは、プロ

ジェクトの採否を問わず、審査結果通知書を通じて申請者にフィードバックされる仕組みになっている。これは、上述したように、将来の学界を担う研究者にとっては、より説得力のある申請書を執筆する能力が必須であり、その涵養もまたプログラムの重要な課題と考えられたためである。

以上のようなフィールドワークのモデル事業と並行して、初年度には、さらにいくつかの取り組みを行った。まず、フィールドワークの経験が豊富なオーストラリア人の常勤助教授を任期付きで採用して、本プログラムの科目を担当させると同時に、英語で論文を書く上での実質的な支援体制を強化した。また、本プログラムの実施にかかわる事務体制の充実、研究科教員のFD、大学院教育に造詣の深い海外の研究者の招聘や海外の先進的な教育取組の視察などをプロモートするために、文学研究科棟の一室をプログラムの拠点となる教育研究推進室として改装した(写真2)。

この教育研究推進室において、本プログラムで履修する学生に対するきめ細かなサポートを行い、経費を適正に管理・執行するため、専任の事務補佐員1名を常駐さ

せることとした。さらに、部局全体でこのプログラムを円滑に実行に移すために、教育研究推進室の内規を新たに定め、研究科長のリーダーシップのもと、副研究科長（室長）、GP責任者、学務委員長経験者らが室員となって、関連規定を整備した。

またAACには、部局内からの推薦に基づいて6名の卓越した海外の研究者を選任した。

モデル事業の試行に加え、平成18年度にはイニシアティブによって設置された教育研究推進室の主催事業として、5回の教育研究推進室ワークショップを開催した。これは、国際的に著名な研究機関で大学院教育に携わる研究者や、逆に国内外の大学院に学ぶことで優れた研究業績をあげることに成功した若手研究者を講師として招聘し、大学院教育の実質化に向けた情報を国際的な視野から収集するとともに、ディスカッションを通じて文学研究科の教員が大学院教育のスキルを相互に高めあうことを目的として創始したものである。具体的な中身としては、スタンフォード大学のJ・マニング准教授（AAC委員）による古典学の大学院教育に関する講演会や、ミネソタ大学のG・フライ教授によるティーチング・アシスタントの効果的な活用法についての講演会を開催した他、大学院のカリキュラムにおいて共通科目が果たす役割に関する教員相互の討議を行っている。このように、大学院教育に関する海外の新鮮なトピックに耳を傾けたり、教員スタッフや大学院生と意見交換を重ねたりといった機会は、これまでにはまったくと言ってよいほどなかったものであり、ワークショップの継続的な開催という形でこれを制度化することができたのは、本事業の大きな成果と評することができるであろう。また、ワークショップの記録については、この事業によって創刊された教育研究推進室の年報『メタプティヒアカ』に採録し、他大学等にも広く情報を提供している。

平成19年度には、前年度のモデル事業を踏まえて調査実習プロジェクトの公募を行い、8名の審査担当者による書面審査と合議によって採択プロジェクトを決定した。教育研究推進室には引き続き事務補佐員を常駐させ、学生のサポートや経費の適正な管理を行った。また、実習プロジェクトと並行して、教育研究推進室主催のワークショップを計9回開催し、前年度と同様にその成果を『メタプティヒアカ』第2号で公刊した。写真3に、ワークショップの様子を、図3にワークショップ開催記録を示す。



写真3 教育研究推進室主催ワークショップ

「人文フィールドワーク養成プログラム」調査報告

教育研究推進室 ワークショップ開催記録

開催回	開催日時	講演者 およびコーディネーター	講演題目
1	2006年 7月18日	J. G. マニング (スタンフォード大学) [周藤 芳幸]	スタンフォード大学古典学科における大学院教育
2	2006年 11月22日	スラボン・ダムリクン (チェンマイ大学) [加藤久美子]	タイの大学院におけるフィールドワーク教育
3	2006年 12月27日	北川 千織 (日本学術振興会特別研究員) [周藤 芳幸]	動物考古学研究とエジプトにおけるフィールドワーク
4	2007年 1月24日	佐久間淳一 (名古屋大学)	大学院の共通科目について
5	2007年 3月14日	G. W. フライ (ミネソタ大学) [佐久間淳一]	ティーチング・アシスタントの効果的な活用法
6	2007年 4月25日	杉藤 重信 (相山女子大学) [佐々木重洋]	先住民運動と調査倫理：オーストラリアにおけるフィールドワークと大学院教育
7	2007年 5月23日	W. J. ハロフスキー (名古屋学院大学) [天野政千代]	学術目的のための実用英語 ——アブストラクトの書き方——
8	2007年 6月13日	栗本 英和 (名古屋大学) [佐久間淳一]	教育プロセスの効果計画
9	2007年 7月2日	高橋 亮介 (日本学術振興会特別研究員) [周藤 芳幸]	ロンドン大学キングス・カレッジ古典学科での学位論文指導
10	2007年 7月27日	河 宇鳳 (韓国国立全北大学校人文大学学長) [池内 敏]	韓国の人文系大学院における研究・教育の現状について
11	2007年 10月31日	和崎 春日 (名古屋大学) 羽賀 祥二 (名古屋大学) 高橋 亨 (名古屋大学) [神塚 淑子]	課程博士論文指導の実践研究
12	2007年 11月21日	G. R. F. フェーラー (カリフォルニア大学バークレー校) コメント：J. G. マニング (スタンフォード大学) [金山 弥平]	UCバークレー校の大学院教育
13	2007年 12月5日	大塚 雄作 (京都大学) [佐久間淳一]	教員の教育活動の評価について
14	2007年 12月27日	周藤 芳幸 (名古屋大学)	大学院教育改革の最前線 ——近年の施策と他大学の取組——

259

図3 ワークショップ開催記録一覧



写真4 ロンドン大学でのセミナー

さらに、大学院生の自立的な研究の成果を国外においても発信するべく、ロンドン大学東洋アフリカ研究所(SOAS)において、平成20年3月17日から18日にかけて、『日本宗教のフィールドワーク』と題するセミナーを開催した。写真4にその様子を示す。

以上にその概略を述べてきたように、本プログラムの事業内容は多岐にわたっているが、その具体的な成果は、以下の三点にまとめることができる。

第一に、2. 教育プログラムの概要と特色で述べたような、フィールドワークという方法論をベースとする教育プログラムを併置したことで、専門領域の壁を越えた組織的な大学院教育の展開への道筋が示されたことである。人文学では伝統的にディシプリンに基礎をおく教育が行われてきているが、新たな研究領域を切り拓くことのできる自立的な研究者を養成するためには、そのディシプリンの殻を破るための方法論をも身につけさせなくてはならない。この点において、「人文学フィールドワーカー養成プログラム」という突破口を確立したことが、今後の大学院教育の高度化に大きく資するであろうことは疑いえないであろう。

第二に、大学院生を対象として、参加・トレーニング型(前期課程)及び企画立案型(後期課程)のフィールド調査実習プロジェクトを公募し、採択されたプロジェクトに対して必要な経済的援助を行ったことである。これに関しては、平成18年度には、モデル事業に対して26件の応募があり、うち13件が採択された。その内容は「エーゲ海における聖域研究の史料調査」(西洋史学)、「北魏石窟寺院の図像読解のための資料研究」(美学美術史学)、「ベルギー王立図書館蔵メーテルランク資料の調査」(フランス文学)、「アフリカにおける「養取・養育」

慣行の現地調査」(文化人類学)、「室町・戦国期の儀礼秩序に関わる文書の調査」(日本史学)、「縄文土偶の衣装表現についての資料調査」(考古学)など、国内外を舞台とする人文学の多様な学問領域にわたっている。

平成19年度には、29件の応募のうちから22件が採択された。内容としては、「現代ラオスにおける伝統染織」(文化人類学)、「古代エジプトのグラフィティをめぐる調査」(西洋史学)、「19世紀フランス壁画研究」(美学美術史)「グリム兄弟の収集した民間伝承の調査」(ドイツ文学)、「京都の都市民俗と伝承世界」(比較人文学)、「水力発電事業と名古屋地区産業の調査」(日本史学)などがあり、やはり国内外を舞台として多岐にわたる調査実習が展開されたことが分かる。この新たな試みが大学院生による自立した調査研究への大きなインセンティブとなったことは、『メタプティヒアカ』1号及び2号所収の当該プロジェクト報告が雄弁に物語っているとおりである。写真5に大学院生のプロジェクト報告の一例を示す。

表1 2007年のカリブソ・ファイナルに出場したプリティッシュ・カリブソニアンの曲目と出身地

①	カリブソニアンの曲名	カリブソ・ファイナルの曲	出身地・文化的基盤の地
①	ロード・クローク	Me Myself and I	トリニダード・トバゴ
②	レベレンド・ブラウン	Make Poverty History	トリニダード・トバゴ
③	ヘレナB	Clean up the Mess	トリニダード・トバゴ
④	クレオパトラ	One Make a Dance	トリニダード・トバゴ
⑤	アレクサンダー・D・グレート	Remembering Slavery	トリニダード・トバゴ
⑥	スイートソット	Guns and Knives	トリニダード・トバゴ
⑦	ブラウン・シュガー	Free Your Mind	トリニダード・トバゴ
⑧	Gストリンダ	The Warning	ガイアナ
⑨	Dアディナル	Who is Really Free?	バルバドス
⑩	ウエンD	Give Thanks	トリニダード・トバゴ

の表1である。文化基盤の地というのは、イギリスで生まれたが、両親の故郷など、自分がどこの文化に所属するのかわからなかったものである。

カリブソ・テントでは、カリブソニアンの歌だけでなく、ユーモアとウィットに富んだ司会者の力量が大きく影響し、西インド諸島の文化を共有する人達の一体感を高める。ロンドンのテントでは、毎年トリニダードからプロのカリブソニアンとジュニア・カリブソ・モナークが招待される。2007年は、プリティッシュ・カリブソニアン、ロード・クロークの兄であるブラウン・ボーイがプロのカリブソニアンとして招待された。また2007年のカリブソ・モナーク・ファイナルでは、トリニダード唯一のカリブソニアン、デビュー・ラダーも特別に参加し、観客人数の倍以上の観客で盛り上がりたほどであった。

5. プリティッシュ・カリブソの変容

2007年のカリブソ・モナーク・ファイナルは、熱狂的な観戦会であったが、翌日金曜日のカリブソ・テントは、落ち着いた静かなコンサートであった。その年のカリブソ・テントに登録したほとんどのカリブソニアンが登場し、カリブソ・モナーク・ファイナルに出場した10人を含めて、20人が参加した。2007年のカリブソ・モナークに輝いたのは、2006年に引き続き若手の女性であるブラウン・シュガーである。夫のレベレンド・ブラウンが彼女のカリブソをつくり、歌唱力が優勝の決め手になったようである。2007年の上位入賞者や近年のカリブソ・モナークは、ブラウン・シュガーのような若手の女性カリブソニアンであるヘレナB、クレオパトラ、ウエンDである。彼女は自分で曲を作らず、カリブソというよりは、カリブソにソウル音楽の要素を加え、リズム感を重視したソ

カを歌っている。このようなソカの歌手であるジェズル・カーターは、カリブソ・テントに初出場の新人であるが、2007年から始まったブルービー・ソカのコンテストで優勝した。カリブソ・テント最終日の出場者20人のうち、カーターをふくめて6人が新人であったが、いずれもソカを歌う歌手であった。(写真3、写真4)



写真3 カリブソ・テント最終日の観客



写真4 カリブソ・テント最終日に集まったプリティッシュ・カリブソニアン

図6 『メタプティヒアカ』に掲載された大学院生によるプロジェクト報告の例

第三に、本事業によって設置された教育研究推進室が、研究科長のリーダーシップのもとで大学院教育の実質化を今後さらに推進していくための橋頭堡へと発展を遂げたことである。上述したように、二年間の助成期間を通じて、教育研究推進室は、G・W・フライ（ミネソタ大学）、河宇鳳（全北大学校）、G・R・F・フェラーリ（カリフォルニア大学バークリー校）らを招聘講師として人文学の大学院教育に関する諸問題を国際的な視点から検討するワークショップを開催した（写真6）。



写真6 G・W・フライ教授（ミネソタ大学）によるティーチング・アシスタントの効果的な活用に関するワークショップ

平成19年度の大学院設置基準の改正によって、大学院では授業・研究指導の改善のための組織的な研究・研修の推進が義務化されたが、本事業によって始められた教育研究推進室ワークショップが期せずしてこれに応える実質を備えたものであることは、やはり『メタプティヒアカ』所収の報告が示す通りである。

(2) 社会への情報提供

当該教育プログラムの内容、成果等に関しては、研究科のウェブサイトにも独立したページを設けて、随時公開してきている（写真7）。また、事業の根幹をなす学生の調査実習の記録、大学院教育の国際化と高度化に向けた教員による海外研究拠点の視察記録（写真8）、及び教育研究推進室が主催するワークショップについては、上述したように同室の年報『メタプティヒアカ』に収録し、公刊してきたところである（写真9）。



写真7 当該教育プログラムに関するウェブサイト

IV 調査研究の現場から

フランス国立近代草稿研究所ブルースト班訪問レポート
—2007年3月12日～21日

加藤 靖恵

名古屋大学大学院文学研究科

フランス国立科学研究所（C.N.R.S.）、近代草稿研究所（I.T.E.M.）のブルースト班は、パリのカルチュランにある高等師範学校の4階に研究室を構え、30年以上に渡って、ブルースト生成研究の拠点として、国内外の研究者、博士課程の学生を迎え入れてきた。今回は、とくにこの研究班が大学院生教育に果たしている役割を中心に調査を進めた。

報告は1991年パリ第3大学の博士課程に入学した折、ブルースト研究者としてI.T.E.M.とも関わりの深い指導教授の Jean Milly 教授の紹介でブルースト班の責任者 Bernard Brun 研究員のもとを訪ね、以後5年間に渡って毎日のように研究所を利用させてもらった。資料の性質上、また普通の文学テキスト研究を超えた技術を習得する必要のため、博士論文で生成研究をテーマに選ぶ学生は、単に大学で用意された講義・演習を受けるだけではなく、積極的に「現場」に飛び込んで行かなければならない。現在もこの研究所には数多くの博士課程の学生が常時訪れている。

ブルースト班の活動内容は大きく分けて、以下の4つがある。

- 1) 資料センターとしての機能

ここには世界の研究者から、著作、雑誌論文、博士論文（時には修士論文）が送られてきている。ブルーストの生成研究の現状を知るために、博士論文のテーマを探している学生はもちろんのこと、地方あるいは外国で教職等についている研究者もパリに来たらず情報収集に訪れるといわれているほどである。

ブルーストの草稿資料は、パリの国立図書館に1962年に大半が集められたあと、1982年には新たに個人収集者から売却された10数冊のノートが加わった。この研究所では70年代にすでに、国立図書館所蔵のオリジナルのマイクロフィルムを入手、多くの研究者に活用されてきた。80年代後半からは、国立図書館でもオリジナルを閲覧することができなくなり、加えてマイクロフィルムの閲覧申し込みのためには一本ごとカードを書く等の煩わしい手続きがある上、

コピーをとるには別の建物の窓口で書類に記入しなければならないが、この研究所では、複写機付きのマイクロリーダーで自由に閲覧・コピーをとることができる。このマイクロリーダーは現在ブルースト班専用の部屋、及び共同の複写室にそれぞれ1台ずつ備えられている。複写室にはコピー機もあり、学生も自由に書籍や資料のコピーをすることが認められている。コピー代等はすべて研究所の経費でまかなわれている。（学生が所属している大学から支払われることはないことを、今回確認した。）

研究所を利用した学生は、皆、博士論文を寄贈しているが、これが重要な資料コレクションとなっている。フランスでは出版されていない博士論文が大部分で、とくにブルースト生成研究に関しては、著作権の問題もからむとあって、出版されているものがむしろ



写真8 教員による海外研究拠点の視察記録



写真9 『メタプティヒアカ』

なお、この『メタプティヒアカ』は、人文学の教育研究を行っている国内の約200の大学・研究機関に送付している。さらに、この成果について、より広く社会に情報を提供するために、『メタプティヒアカ』の各記事をPDFファイルとしてホームページからダウンロードできるようにした。

4. 将来展望と課題

(1) 今後の課題と改善のための方策

本プログラムはまだその緒についたばかりであるが、カリキュラムの改革やモデル事業の施行を通じて、将来に向けて解決すべきさまざまな問題点が浮かび上がってきた。具体的には、多様な学生を大学院前期課程に受け入れるための導入教育・基礎教育の強化、前期課程を修了した後に社会へ出て就職する学生のためのカリキュラムの充実、後期課程に進学した学生が修業年限内で課程博士論文を執筆できる指導体制の整備などが急務となっている。このような諸問題の解決に向けて、現在、本研究科では「人文学フィールドワーカー養成プログラム」を発展させた「高度人文学ナレッジワーカーの組織的育成」のためのプログラムを検討中である。また、本事業を通じて確立されたアカデミック・アドバイジング・コミッティなどを通じた大学院教育のさらなる高度化と国際化のための気運を、より組織的かつ継続的に展開していくことが今後の課題となろう。

(2) 平成20年度以降の実施計画

平成20年度以降も、研究科マネジメント経費によって「人文学フィールドワーカー養成プログラム」を継続

して実施することが決定されており、既に平成20年度の調査実習プロジェクトの公募と審査が進められている。教育研究推進室ワークショップの継続的な開催についても同様であり、既に平成20年5月17日には、デューク大学のG・ワイゼンフェルト准教授を講師とするデューク大学の博士課程教育に関するワークショップを開催しているところである(写真10)。



写真10 平成20年5月開催のワークショップのポスター

なお、現在、大学院教育改革支援プログラムに、本事業を発展させた「高度人文学ナレッジワーカーの組織的育成」プログラムを申請中である。このプログラムでは、本事業の成果を踏まえ、大学院生の国際的な研究発信能力のさらなる強化策をも取り込みつつ(写真11)、高度専門職業人を目指す学生に対しても「人文学フィールドワーカー養成プログラム」で培ったノウハウによる支援を展開する予定である。



写真11 ハロフスキー講師による「学術目的のための実用英語」ワークショップ

図4に、「高度人文学ナレッジワーカーの組織的育成」プログラムにおける履修プロセスの概念図を示す。

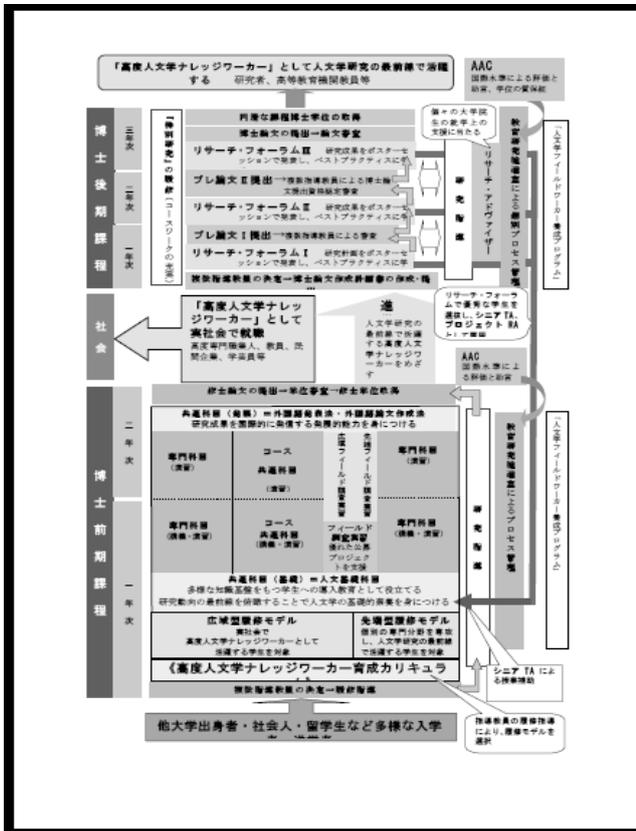


図4 「高度人文学ナレッジワーカーの組織的育成」プログラムにおける履修プロセス

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における評価

【総合評価】

- 目的は十分に達成された
- 目的はほぼ達成された
- 目的はある程度達成された
- 目的は十分には達成されていない

〔実施（達成）状況に関するコメント〕

フィールドでの研究成果を国際的に発信できる能力を備えた若手研究者の養成を目的として、フィールドワークという方法を軸とした教育の展開は、伝統的ディシプリンに基礎をおく人文科学の分野に新たな視座を提供するものであり、目的・波及効果はともに高く評価される。また、大学院学生の計画した優れた実地調査プロジェクトの公募と支援（人文学フィールドワーカー・プロジェクト）におけるプロジェクトの合議による選定は大学院教育の実質化に貢献したと評価される。

情報提供は、ホームページで年報を公開するなど着実に実施されている。

今後、本教育プログラムの実施・成果を踏まえた課題等の十分な検証を行い、多様な大学院学生の受講を想定した指導体制の一層の充実等を図ることなどにより、自主的・恒常的な展開を図ることが望まれる。

（優れた点）

- ・教育研究推進室を設置し、現場での調査・資料収集の方法論の徹底指導、人文学フィールドワーカー・プロジェクトなど、トレーニング型＋企画立案型の5年一貫コースを機能させた点は高く評価できる。

（改善を要する点）

- ・本教育プログラムで培った教育方法等を、今後の高度専門人材の育成への取組として、今後の自主的・恒常的な展開に活用する方策を検討することが望まれる。
- ・多様な大学院学生の受入やキャリアパス、大学院学生が希望する研究分野に幅広く対応できる指導体制の構築などの課題への対応を、更に具体化することが必要である。